

基礎教育と実習施設との連携による教育効果 (第1報)

Educational Effects of Cooperation Between Nursing School and the Field of Clinical Practice (The First report)

平井 純子 前山 直美 森山 恵美 永井 朋子 中嶋 真澄

Jyunko HIRAI, Naomi MAEYAMA, Emi MORIYAMA, Tomoko NAGAI, Masumi NAKAJIMA
(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：実習病院臨床指導者 連携教育 実習指導 教育効果 学生 演習

はじめに

平成23年3月厚生労働省「看護教育の内容に関する検討報告書」によると、学生の实践能力向上のための教育体制として教員と実習指導者の役割分担と連携が重要と明記している。¹⁾

また、近年、実習施設と基礎教育機関が力を合わせて看護基礎教育の質向上を目的とするユニフィケーションシステムが導入されている。²⁾

本学科は平成19年4月に、Y看護専門学校の看護師養成教育100年の歴史を引き継いで神奈川歯科大学に設立された。その当初より現在まで看護教育に必須の臨地実習のほとんどをY病院（以下病院）が主たる実習病院として引き受けている。

以上の経過より設立6年目を迎えた平成24年11月、病院は看護部長、本学は基礎看護学教授を責任者とし、第1回会議を開催し双方の合意のもとに連携教育がスタートした。

今回、24年度の取り組み経過をまとめるとともに、初回として試行された臨床指導者（以下指導者）による本学演習の授業参観と2年生成人看護学実習I指導へ繋げる連携教育を実施したところ、一定の示唆が得られたため第1報として報告する。

1. 連携教育の概要

1) 連携教育の目的

基礎教育と卒後教育との更なる連携を図ることを主なねらいとし、看護実践研修及び教育実践を共に企画・試行していくことを通し、教職員の相互研鑽及びより効果的な臨地実習指導や基礎教育の実践を目指すことを本連携の目的とする。

2) 連携教育の概要と取り組み経過

病院看護部と本学看護学科は、予てから臨床と基礎看護教育の連携について協議していたが看護部長、本学教授により「連携教育」が提起された。第1回会議は病院で開催され目的の確認とともに具体的な取り組みが議論された。

その結果、①病院看護師の現任教育に教員が参加し基礎教育と卒後教育の継続に連携する②指導者が大学の授業に参加して実習指導に繋げる等の取り組みが検討された。初年度は後者に決定したが、本連携は試行錯誤をしながら循環的に見直し、実践していくことになった。第1回は、時期的にも実現可能な2年生成人看護学実習Iと成人看護学演習を連動させることになった。

実施にあたっては、本学成人看護学教員が中心となり、演習授業参観に向けて準備・調整を行った。また、演習実施からおよそ1か月後の成人看護学実習Iにむけて、成人領域以外の実習担当教員との情報共有をはじめ、学科会議において全教員に連携教育の取り組みを周知した。また、実習を担当する各教員の病棟研修・指導者との打ち合わせの調整を行った。学科内の連携教育の推進者として教員3名を置き、病院打ち合わせ会議の出席、実施の推進から評価まで関わった。

授業参観・実習終了後、成人看護学実習I評価会と同時に連携教育について意見交換を行った。この会議には本学推進者とともに8グループの実習担当教員8名、病院側は推進者の教育担当師長、指導者10名（内7名は演習参加者）が出席した。

24年度末には、連携教育最終評価会を開催し、24年度取り組みの効果と今後の課題について議論しその効果を確認するとともに同内容を次年度も継続することになった。

受付日 2014年2月2日

受理 2014年3月19日

2 連携教育の実施結果

1) 成人看護学演習参観

第1回会議開催から2か月後、第1回連携教育「指導者の授業参観」が試行された。病院からは12名（指導者11名、教育担当師長）が参加し成人・老年領域の5名の教員とともに演習が実施された。

演習は周手術期看護における看護技術の習得を主なねらいとし、前期授業の看護過程の事例を継続し「胃切術後1日目の観察と早期離床への援助」をテーマとした。1クラス90分1コマで展開、9時から12時10分まで2クラスの学生81名が受講した。

演習は、1ベッド1グループ（4～5名）10グループ編成で実施した。指導者は、担当グループの学生から実施後の報告を受ける場面を中心に直接指導を担当した。教員は2グループを担当し実施場面を直接指導したが、結果的には、指導者が1グループの実施場面にも関わった。学生へは、演習ガイダンスの際に臨床指導者の演習参観があることを説明した。授業参観は「大学と病院が連携して学生へ効果的な教育を目指す試みであること、学生を理解して実習指導に活かす連携教育の一環」であること説明した。

指導者へは、事前に演習計画・演習に関連した授業資料を配布し、演習開始前に演習の流れや学生の状況などのオリエンテーションを実施した。

2) 成人看護学実習Ⅰにおける指導者と担当教員の連携

連携教育推進に向け、各教員に事前の病棟研修を推奨した。本学推進担当者が中心となり病院推進者（教育担当師長）と調整し、全教員が指導者の日勤務時に、0.5～1日程度の研修および指導者との打ち合わせを実施した。また、実習指導案を提示し実習指導に向け学生の背景や指導の具体的な進めかた、スケジュールなどを説明した。

3) 演習授業参観終了後アンケート調査及び結果

病院指導者による授業参観の効果を検証するため、臨床指導者と学生を対象に授業参観終了後に調査を実施。調査結果は実習終了後、指導者・教員間の意見交換会評価会に報告した。

(1) 授業参観アンケート結果

調査対象：2年生81名（回収数62名 回収率76%）

臨床指導者11名（回収数11名 回収率100%）

調査方法：

- ・学生へは演習後の成人看護学Ⅰ授業終了後にアンケート用紙を配布し当日教室で回収した。
- ・演習開始前、指導者に主旨を伝えアンケートを依頼し、演習当日に回収した。

調査時の倫理的配慮

学生へは、アンケート用紙に調査目的及びその結果は目的外に使用しないこと、また成績に関与しないことを記載した。アンケート用紙配布時に、その旨の説明をして同意を得た。指導者へはアンケート用紙への記載と配布時に説明するとともに、連携教育実施前後に、これらの取り組みを研究的にまとめることを提案し全員の同意のもとに進めた。

(2) 調査結果

①指導者アンケート結果

指導者へのアンケート内容は全て自由記述式とした。

・「演習全体をとおして気づいたこと」を学生について、演習内容について、今後の連教教育について回答を依頼した。

学生については、指導者全員が病院実習でみる緊張した学生と比較し「学生が緊張しないで生き活きと学習に取り組んでいて明るい」「伸び伸びしている」「看護の根拠が欠けている学生でも質問をすると理解している」などをあげていた。

反面「言葉使いや学生個々の理解や取り組み方に個人差がある」「技術が実施できても何のために実施するか理解してない」「事前学習が不足している」「私語が多い」などがあげられた。

演習内容と演習中の学生から気づいたことは、演習は実習場面と繋がりをもっていった事をあげ、演習時であれば指導者として学生に多くの事を伝えられると実感、演習参加が貴重な体験になったことがあげられた。

演習方法について、患者役の学生の感想を聞く事や指導者が患者役をやる等を提案していた。また、学生間で意見を出し合い演習が効果的に進めている事にも気づいていた。

演習中の学生は、実習と違い「ここはどうするのですか」と気さくに質問してきた事をあげ、技術実際時「何のために」という事がわからず、実技だけできる学生がいる事に気づき「出来る」と「わかる」は違う事を実感した等があげられた。

また、演習での学生の知識・技術の状況から、臨床の看護師は少し学生に求めすぎなのではないか、今の学生の段階をスタッフにも周知していく等であった。

今後の連携教育にむけては、指導者全員が、授業参観をきっかけに学習内容を把握する事ができ指導に活かせることあげ「実習で担当する学生と演習ができれば実習に繋がりアドバイスできる事が増える」「信頼関係をつくるきっかけになる」「授業参観で学生の様子がわかり実習に活かそうである」等連携が大切さをあげていた。

②学生アンケート結果（図1～2、表1）

質問7項目以下、文中の__示す。1項目は指導者の

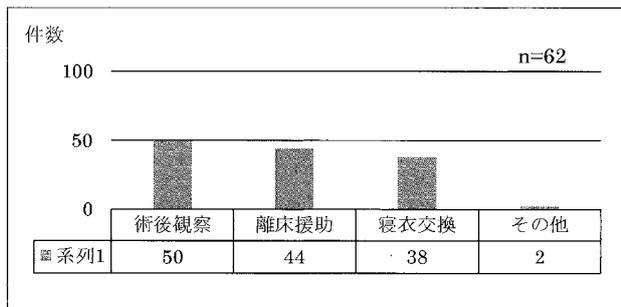


図1 指導者から受けた指導内容

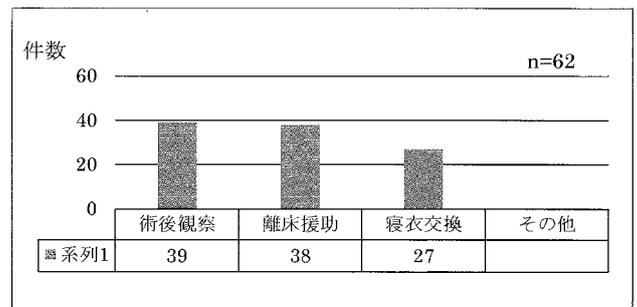


図2 学びになった指導内容

表1 印象に残った指導者からの主な指導内容

- ① ベッド柵の位置及びベッド周囲等環境への配慮
- ② 足背動脈の位置確認の方法と重要性
- ③ 術後観察のポイントと報告のしかた
- ④ 苦痛を軽減して離床する方法
- ⑤ 患者への説明や声掛けの必要性
- ⑥ 患者が自ら実施したいと思えるようなサポートをすることの必要性

授業参観と直接指導を受けたことに対する感想を自由記述とした。学生は62名全員が演習中緊張したと答えた。

・指導者の授業参観は、演習する上で緊張したかについては、全員が緊張したと答えた。

感想ではほとんどの学生が緊張したが、その緊張で演習に真面目に取り組めたとも答えていた。

・学生が指導者から指導を受けた内容は図1に示した。
ア. 術後観察50名 (83%) イ. 離床援助44名 (71%)
ウ. 寝衣交換38名 (61%) エ. その他 (J-VACの使用法、検査データの意味) 2名であった。

・特に学びになった指導・コメントについては図2に示した。

ア. 術後観察39名 (63%) イ. 離床援助38名 (61%)
ウ. 寝衣交換27名 (44%)。

また、学生の印象に残っている指導者からの指導は表1のとおりである。その他、通常の演習では気づかない細かな助言を受けたこと、学生間で工夫していたことを指導者に褒めてもらったこと、本来の患者は、模擬患者とは違うからもっと痛みを訴えることなど「なるほど!」と思えることをたくさん教えて頂いたことがあげられた。

・演習内容は全員が実習に活かせるかについては、解答した学生全員が活かそう、演習目標も達成したと答えた。

3) 実習終了後の連携教育意見交換会での意見

「授業参観をどのように実習指導に活かせたか」につ

いて実習終了日に意見交換を行ったが、出席した指導者7名全員が「演習に参加して良かった」と答え、その理由は5つに大別できた。

- ① 以前と比較し、学生の学習過程等レディネスがわかり実習指導ができた。
- ② 授業内容や学生間のやり取りを知ることで、実際の学生への関わりに活かされた。
学生の状況が把握でき、これまでの実習指導では高い目標で学生に臨んでいたことがわかり、今回は学生の目線で指導することに努めた。
- ④ 講義で学んだ事と演習内容を結び付けることができている事がわかったため、実習で意味づけるよう意識して学生に関わった。
- ⑤ グループでは学生間の役割があり、それが上手く機能すると演習もうまくいくことに気づいた。実習時、リーダーの学生にグループの雰囲気聞いて実習指導に活かした。

4) 実習担当教員の病棟研修と指導者との事前打ち合わせについての意見

実習担当教員は、全員事前に実習病棟に半日程度の研修と指導者との打ち合わせを実施した。

指導者から意見は

- ① 事前に記録用紙の確認や今までの実習での様子等の情報を知る事ができ、指導のイメージができ計画をたてる事ができた。
- ② 互いの信頼関係を築く事ができた。
- ③ 教員の実習に対する考え等を聞き看護過程に重点

をおいた指導ができた。

- ④ 個々の学生の様子を前もって知る事で、いつもより非常にやりやすかった。
- ⑤ 目標を共有する事で、求めるところがどこまでか把握できた。
- ⑥ 病棟スタッフへもどこまでが到達点か伝える事で指導に活かされた。

一方、教員側からの意見は

- ① 実習前に病棟をみて指導者と関わった事で緊張が和らいだ。
- ② 事前に学生の情報を伝え、指導者と確認できた。
- ③ 学生のレディネスや実習目的・ねらいを再確認しあった事から根拠を何度も何度も指導してくれるなど指導に活かしてもらえた。
- ④ 「これができて当たり前」ではなく「これができたね」と言って学生にフィードバックしてもらえた。
- ⑤ 教員自身が連携を意識し、指導についていつもより共通理解して進める事ができた等があげられた。

6) 学生の実習目標到達度

Y病院で実習した学生8グループ35名の実習評価表の評価平均点を単純比較したところ、他3施設の実習学生の到達度より高い傾向にあった。

3. 24年度連携教育についての考察及び今後の課題

1) 指導者が授業参観で学生を理解することの意義

授業参観の目的は、①教員と実習指導者が交流し相互理解を深める、②実習指導者は、基礎教育における学生の実態を知り臨地実習に出る前の学生のレディネスを把握するであった。

アンケート結果によると、指導者全員が、実習中と演習中の学生の緊張の違いに気付いていた。指導者は、学生が緊張することなく伸び伸びと演習に取り組んでいる姿に驚いたが、学生は全員が緊張したと答えていた。この事から、学生は実習中予想以上に緊張していることがわかった。また、指導者は演習での学生の反応や学習習得状況から、これまでの実習指導は、高い目標を学生に臨んでいたことに気付いていた。

松田らの「成人看護学における演習補助者との連携教育」の研究³⁾によると、演習補助者は学生の指導を通じて学生の思考の仕方や技術力を知り、臨床指導や新人看護師の育成も踏まえて自分の指導法を見直していたと述べている。今回、指導者は演習を通じて学生の未達成な技術力や思考の程度、実習中は、過度に緊張している学生を知った事がわかる。そして、指導者はこれまでの実習指導を振り返り、思考や技術力が未達成な上に、緊

張が強い学生にどのように臨めばよいのかを考える機会になったのではないかと考える。

文部科学省の「看護教育のありかたに関する検討会報告書」¹⁾や臨床と教育の連携に関する研究でも、実習施設と大学との協力と連携の必要性について明記され、病院指導者の演習参観は、他大学と病院間で行われている。神奈川県における看護教育のありかた検討会報告²⁾では基礎教育における実習指導の充実を目的として、基礎教育と実習病院相互の人事交流を挙げている。教員が実習施設で最新情報を得、実習病院からは教育の現状や教育方法を理解して実習指導に活かすユニフィケーションを提起している。本学は、複数の実習施設の中で、一番多くの学生を受け入れているY病院とその第一歩をスタートしたところである。

病院の実習指導者は、学生にとって特別な存在であり、その一言一言に過度に緊張する傾向がある。学生は、今回実習前の演習がきっかけとなり適度な緊張で実習に臨むことができれば授業参観のもう一つの効果と考えることができる。学生と指導者との相互関係に基づきさらに学びが深まる実習が期待できる。今回、実習終了後に学生への調査はしなかったためその効果を検証する事はできない。しかし、学生の実習目標到達度評価は他施設より高い傾向にあった。

以上から、指導者が授業参観により教育の現状や教育方法を理解して指導した事、学生は授業参観で指導を受けた事から適度な緊張感を持って実習に臨んだ事が学習効果を上げたのではないかと考える。

2) 指導者が演習で学生指導することの効果

学生は、全員が緊張して演習をしたと答えながらも、その緊張感が演習の目標達成や学びに繋がったとしていた。表1に示した印象に残っている指導の内容からも、学生は、教科書や資料の中に示されている抽象的な援助方法から具体的な援助方法、留意点を指導者から具体的に学んだ事がわかる。授業・演習のねらいである合併症の予防と観察、回復に向けた具体的な援助法の習得に繋がった。

指導者は、術後1日目の患者と病室環境を前提により具体的な指導をしていた。学生は一つ一つを真剣に受け止めていた。また、学生は「なるほど!」と思えるものをたくさん教えてもらった、指導者のいた演習は良かったと記載しており臨床現場で働いている看護師ならではの臨場感を持った具体的な指導が学生の印象を強くし学びに繋がったと考える。

成人看護学の授業では、映像や実物を提示しながらその目的・根拠、留意点などを教授している。しかし、演習時にそれらが連動した学習とする事が難しい。指導者へは、授業資料等を配布し、授業内容を伝えていたため、

指導者が具体的な指導へと発展ができたと考える。また、指導者は、病棟では他の業務と並行して学生を指導しているが演習ではじっくり関わることができたと答えていた。指導者自身も臨床を離れて学内で余裕を持って指導ができた事も学習効果を上げた一因だと考える。

3) 教員と指導者間の事前打ち合わせの効果

看護基礎教育における臨地実習は、机上の学習によって構築された知識や技術などを実際の医療現場において看護実践に応用する重要な学習であることは言うまでもない。その臨地実習は、実習施設と看護教育機関との協力連携がなければ成り立たない。今回の連携教育により事前に教員と指導者が打ち合わせを行うことで、指導者側は、実習目標や進め方の確認や学生を受け入れる上でのスタッフへの情報提供など準備をすることができ指導の実際に反映できたのではないかと考える。山田ら⁴⁾の臨地実習指導者への役割期待「病棟スタッフ・看護教員との連携における役割」によると、指導者の教員との連携の役割、実習指導者としての役割として①実習目的や進め方の確認②学生の学習状況を教員と共有する③学生の学習状況や指導状況を他の実習指導者と共有する等を必須項目としてあげている。

今回実施した指導者との事前打ち合わせは、正しく指導者がその役割を果たすことにも繋がっている。今回は、3年生の実習終了時期に、成人看護学実習Ⅰのみに向けて実施したことや連携教育に意識的に関わったことから実現した。しかし通年5月から開始される3年次の領域別実習も事前打ち合わせは必要である。実習が連続し複数の病棟の場合、難しいこともあるが可能な限り実施していくことを推進していく。病院側からも実習説明会や臨床指導者会議でその必要性について意見が出されている。

以上、平成24年度に実施した病院と本学との連携教育の効果を、指導者との意見交換会や授業参観アンケートから分析し考察した。その結果、指導者による授業参観から実習に繋げる連携教育は教職員の相互研鑽及びより効果的な臨地実習指導や基礎教育の実践にむけて有用であることを確認することができた。

今後は、実現可能な計画を立案し実施後の効果を検証するとともに、基礎教育と病院がさらに協力連携し「看護師を育てる」ことを推進していくことが重要である。

まとめ

平成24年度から主たる実習病院と本学との連携教育を開始した。第1回目として、病院指導者が成人看護学演習の授業参観とその後の成人看護学実習Ⅰまでを連携して効果的な臨地実習指導を目標とした。その結果、基礎教育と病院との連携教育についての示唆は次の通りであ

る。

- 1) 指導者は、演習に参加し学生の学習環境や学習習得状況を把握する事で学生の理解に繋がり、その後の実習指導に活かす事ができた。
- 2) 学生は、指導者から術後1日目の観察内容・援助方法等具体的な指導を受け、授業で学んだ知識と技術に繋げる事ができた。
- 3) 教員と指導者の事前打ち合わせは、実習目標や指導内容、学生のレディネスなど相互に理解し共有でき実習指導に活かす事ができた。
- 4) 指導者による授業参観は、基礎教育との連携教育に有効である。

おわりに

今回は、病院と大学との連携による学習効果の裏付けとなる客観的指標は見いだせなかったが、連携教育の効果について複数の示唆を得る事ができた。今後も連携教育を推進していくとともに、学習効果を測定し実習指導者と教員との連携による効果を明確にしていく必要がある。

多忙な看護業務の中、多くの指導者を本学に派遣、また臨地実習への理解と協力を継続して頂いているY病院の看護部長はじめ師長、指導者の皆様に深謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容に関する検討報告書、9、(2011)
- 2) 神奈川県：神奈川県における看護教育のありかた・最終報告書、10、(2012)
- 3) 松田麗子他：成人看護学演習における演習補助者と連携教育・生命健康科学研究所紀要、122、(2011)
- 4) 山田聡子他：看護教育専門家から臨地実習指導者への役割期待 看護教育、Vol54、No8、757、(2013)
- 5) 大川宣容：講義—演習—実習のつながりのなかで行うシミュレーション教育 看護教育、Vol54、No5、(2013)

著者への連絡先：平井純子 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地 神奈川歯科大学短期大学部看護学科
TEL：046-822-8766
E-mail：hirai@kdu.ac.jp